

二〇二五年度 大妻中野中学校

第一回アドバンスト入試
第一回グローバル入試

(二月一日午前 問題用紙)

国語

座 席 番 号

受 験 番 号	番 氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて全部で十一ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
受験番号と座席番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ピンと八の字に広がる鼻髭を蓄えた男がおもむろに立ち上がると、ひとつ咳をして、話しはじめた。

「私は御覧の通り委員の中で一人軍服を着して居ります」

押し殺した低い声は、周りを圧倒するに十分だった。

黒い軍服礼装の左胸に、たくさんの胸章が光っている。

男の席の上には「陸軍軍医総監・陸軍省医務局長 森林太郎」という名札が置かれていた。

* 森鷗外である。明治四十一年（一九〇八）年六月二十六日、午後二時十分を少し過ぎて臨時^{＊2} 仮名遣調査委員会、第四回委員会が始まっていた。

鷗外・森林太郎は、四十六歳になっていた。髪を短く刈り込んで七三に分けた幅の広い額には、知性と自信がみなぎっている。

鷗外より五つ年下の万年は、この会議の数日前から胃がもたれていた。

「できれば、休みたいんだがな」と今朝、妻にも言ったほどである。

「どうしてですか？」と妻は背広を整えながら訊いた。「具合でも悪いの？」

「いや、なんだかいろいろなことが思うようにいかないようですね」

「何がですか？」と妻は訊いたが、万年はそれをうまく言葉で説明することはできなかった。

五分に刈った頭は、ごま塩のようで、額には皺が三本ほど深く入っている。万年は、黒縁の丸めがねに息を吹きかけると、皺になったハンカチでレズを拭いた。

「今日は、①立板に水をかけるように理屈を並べて自分の意見を言う人が話をされるのさ」

そう言って万年は深く息を吐いた。

「で此席へは個人として出て居りますけれども、陸軍省の方の意見も聴取^{きと}って参^{まゐ}って居りますから、或場合には其事を添えて申そうと思ひます」

二十九歳の時に「医学博士」の称号を得て以来、「台湾総督府陸軍局軍医部長」「近衛師団軍医部長兼軍医学校長」「第二軍軍医部長」などの重要なポストで軍医としての業績を残しながら、さらに翻訳や詩文など「文学」の面での活躍もある鷗外は、まもなく「文学博士」の称号を得るだろうと噂されていた。

議論をふっかけるのが好きで、負けず嫌い。鷗外から議論をふっかけられたが最後、骨の髄まで絞られるようなしつこさにいたぶられるという。外は強い雨が降っている。鬱陶しいほど暗く湿った梅雨の雨が三日も前から降り続いていた。

臨時仮名遣調査委員会の主事を務める上田万年は、鷗外の声を聞いて、胃の痛みを感じていた。

鷗外は、自分に議論を仕掛けてくるかもしれない。

長い会議用の机の向こう側に立って、話している鷗外の目が、じっと自分を見ている。まるでへビに睨まれたカエルのように、身動きもできず、万

年は脂汗が脇の下を流れるのを感じていた。

「最初に仮名遣いというものはどんなものだとは私は思っている、それから仮名遣いにはどんな歴史があるかということについて少し申したいのであります」

②黙って下を見て聞き流すしかない。

しかし、あとで、「上田博士、私の意見にどこか間違っているところがありますか？」などと言われたら、「聞いていませんでした」と答えるわけにもいかない。

自分より優れた人間はいない、と鷗外は思っている。そして劣った人間が、鷗外は大嫌いなのだ。しかし、鷗外はここで、何を言おうとするのだろうか……。

万年は、この委員会では主事であるが、東京帝国大学教授、文学博士であり、国語学研究室の主任であった。日本人として初めて言語学を専門にした学者である。

鷗外がベルリン留学から帰ってくるのと入れ違いに、万年もドイツで三年、加えてフランスで半年の留学を果たしている。言語学を修めるための*₃文部省からの派遣留学であった。

その成果として、万年は、今から十年前の明治三十一（一八九八）年の七月に「国語改良会」を設置することの必要を説いて、それが明治三十五（一九〇二）年の文部省の「国語調査委員会」となり、何度も議論を重ねて、今日の「臨時仮名遣調査委員会」開催になったのだった。

万年が「国語改良会」を作ったのは、③みんなが共通に使うことができる「国語」を作るためである。

日本語を研究することによって「国語」が必要だと万年は感じた。

「国語」は、「すべての日本国民のための言語」である。

「これから日本が世界に向かって大きく前進するためには、地方の人と都会の人が同じ言葉で意見を言い合えるようにならなければならない。身分の上下、職業の違いを超えて、話ができる『国語』が必要なのだ」

……そう言って④みんなが新しい日本語である「国語」を作ろうとしていた。

三年前、仮名遣いや口語としての日本語の話をして、夏目漱石が『ホトトギス』に書いてくれた「吾輩ハ猫デアル」は、まさにその大きな布石だった。

これまでの二葉亭四迷などが書く講談風の「言文一致」でなく、猫がしゃべる日本語は、読みやすく、おもしろいというので、大変評判になった。この調子で、漱石がもっとおもしろいものを書いてくれれば、これが日本中に広がって、新しい口語表記の新仮名遣いが普及してくれるに違いないと思っていたのだが……ここで鷗外が出てきてしまった⑤……。

「一体仮名遣いという言葉は、定家仮名遣いのおかげから始まったのでありましょうか。そこで此のものを指して自分は単に仮名遣いと言いたい」
こう言って、鷗外はちょっと息を止めると、前よりやや大きな声を出して話しはじめた。

「単に仮名遣いというのは、諸君のほうで言われる歴史的な仮名遣い、すなわち古学者の仮名遣いを指すのであります」
万年は、いきなり鷗外から胃を素手で掴まれたような気がした。……やはり、我々の意図している仮名遣いに、鷗外は真っ向から反対しようとしているのだ。（中略）

それにしても、自分だって「鷗外」と書いて「おうがい」と自分で発音しているじゃないか、と万年は思う。それをどうして「あうぐわい」と書く必要があるのだ。「おーがい」と書いたほうがもっと分かりやすい。「鷗」に「あう」、「外」に「ぐわい」と振り仮名があるのは、そういう発音がむかしあったからで、時代を経て明治の今となつては、だれもそんなふうには発音していない。それを踏襲する意味がどこにある。

前々回の六月十二日、大槻文彦は「時代を経て、発音が変われば、それを表す表記の仕方も変わってくるのが当然です」と言った。大槻文彦は国語学者で、日本で初めての近代的国語辞典と言われる『言海』を編纂した人物である。

現代日本語の発音を反映する新しい仮名遣いを使うことに決めて教科書に採用すれば、十数年後には新しい「国語」をみんなが使うようになる。国語調査委員会のメンバーの半数以上は、この意見に賛成である。

しかし、この新仮名遣いに絶対反対という人も少なくない。鷗外も、もちろん、そのひとりである。

前々回の大槻文彦の話を、鷗外は苦虫を噛みつぶしたような表情でじっと聞いていた。

今日は、その反論というより、ここでこの仮名遣いについて、決着を付けると豪語して来ているという話が数日前から伝わっていたのである。

「陸軍省の方の意見も聴取って参つて居ります」

というのは、背後に元帥陸軍大将の山県有朋も控えているぞということ暗にほめかす言葉である。そして、山県が控えているということは、天皇と大日本帝国を護るための機関が私の後ろにはあるのだという意味にもなる。

こんなふうに権力や人の力の及ばないものを傘に着て、滔々と自分の意見を述べることを鷗外は得意としていた。

「歴史的な仮名遣いは、語源とも深い関係がある」と鷗外はさらに大きな声で言いはじめている。

言われなくても、そんなことは分かっていると、万年は思う。

「地」の発音は「ち」である。だから「地面」と書くときには「【イ】」と振り仮名をつけるのが正しい。しかし、「【ロ】」と「【ハ】」の発音の区別は、もう江戸時代中頃からできなくなつてしまつてゐる。「【ニ】」と書くのは正確に言えば間違いだらうが、発音をもとにした書き方でよければ「【ホ】」と書くのも認めたほうがいいのではないか。

鷗外は、しかし、「間違い」は間違いであつて、間違いを認めてしまふことは、決して許してはならないと言う。

それを諭えるのに、鷗外は、こんなことを言いはじめていた。「たとえば、これは、気の狂つた人があつて道もない所を奔り、その後ろをたくさんの人がついて行くようなものです」

「気の狂つた人」は、他でもない、夏目漱石のことを言おうとしているのだらう。（中略）

漱石の後ろにいるのは、上田万年である！ 上田万年を問い質してやる！ という怒りが鷗外の言葉の端々から見え隠れする。（中略）

鷗外は、二時間に及んで古今東西に及ぶ言語と表記の問題を取り上げて聞く者を煙に巻き、「国語調査委員会」が行っている仮名遣いの調査はまだ不十分であると主張した。そして小学校の時から正しい「旧仮名遣い」を教えることによって正しい「国語」が書けるようにすべきであると力説したのであった。

万年は直接、鷗外の攻撃を受けることはなかったが、鷗外の演説が終わったと同時に、軽くめまいを覚えた。

「何か、他にご意見はありませんか」

だれも何も言わなかった。

みな、疲れ切っていた。鷗外の話は、聞くだけでも十分人を疲れさせた。

この前までの会議では、「新仮名遣い」で行くことがほとんど了解されていたのだ。

万年は、漱石にもそう話していた。新しい日本語で新しい表記で新しい文学を作り出そうと。

「そうだな、*4 候文で手紙を書くのも悪くないが、別に候がなくても、手紙は書ける。学生に手紙を書くのに、候文だと堅苦しくて言いたいことが七割しか伝わっていないような気がする」

漱石はそう言っていた。

「武士の世が終わってもう三十数年、候文を止めて、みんなが分かる言葉を作る時が来たんだ」と万年は、右手で、ずり落ちる黒縁の丸めがねを低い鼻の上に持ち上げながら言ったのだった。

しかし、今、それがあつてなくひっくり返ってしまう。（中略）

この明治四十一（一九〇八）年を境に、日本語は、確実に、大きく変わろうとしていた。

上田万年たちは、ふつうに話して、できるだけ多くの日本人が分かる日本語を「国語」として、分かりやすい発音主体の「新仮名遣い」で書かれた新しい教科書を作ろうとしたのである。

日本語の変化の波をだれも抑えることはできない。

（山口謠司『上田万年とその時代 日本語を作った男』集英社インターナショナル）

*1 森鷗外 …… 日本の小説家。『舞姫』『高瀬舟』などを書いた。

*2 仮名遣 …… 日本語のかなの書き方。例えば、昔は「かげろう」を「かげらふ」と書いていた。

*3 文部省 …… 文部科学省の前身。明治四年に設置され、平成十三年に科学技術庁と統合された。

*4 候文 …… 明治時代に主として手紙に用いられた、丁寧な文体。「である」の代わりに「候」と書く。中世までは話し言葉であったが、近代には公的な文書にも用いられるようになった。

問一 — 部①「立て板に水をかける」という表現について次の問いに答えなさい。

(1) この表現は、一般的にほめ言葉かけなし言葉かどちらとして用いられるでしょう。考えて、その理由を説明しなさい。

(2) これと正反対の意味になる新しい表現を作って答えなさい。

問二 — 部②「黙って下を見て聞き流すしかない」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア. 自分が鷗外よりも劣っているという自覚があるため、目を合わせづらいから。

イ. 鷗外と目を合わせると、自分に攻撃のほこ先が向くに違いなから。

ウ. 鷗外の高圧的な弁論が自分の責任を追及しているようで、恐ろしかったから。

エ. この後鷗外から発せられるであろう質問の回答を、必死で考えていたから。

問三 — 部③「みんなが共通に使うことができる『国語』を作る」とありますが、のちに上田万年が作ることに成功したこの「国語」は、現在では特に何と呼ばれていますか。漢字三字で答えなさい。

問四 — 部④「みんな」とは、ここでは誰のことを指していますか。本文中の言葉で答えなさい。

問五 — 部⑤「……」とありますが、ここに「……」があることでどのような効果がありますか。説明しなさい。

問六 文章中の四角で囲われた部分について、「イ」「ホ」に入る言葉としてふさわしいものをそれぞれ考えて答えなさい。
同じ言葉を入れてもかまいません。

問七 次の文章は、夏目漱石の『吾輩は猫である』の一節です。これについて後の問いに答えなさい。

そのよく日吾輩は例のごとく縁がわにでて心持ちよく昼寝をしていたら、主人が例になく書斎からでてきて吾輩のうしろでなにかしきりにやつておる。(中略) 吾輩はこのありさまを見て覚えす失笑するのを禁じえなかった。彼は彼の友に揶揄(やゆ) (からかうこと) せられたる結果としてまず手はじめに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでにじゅうぶん寝た。あくびがしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆をとっているのをうごいては気のどくだと思うて、じっとしんぼうしておった。彼はいま吾輩の輪郭(りんかく) をかきあげて顔のあたりを色どっている。吾輩は自白する。吾輩は猫としてけつして上乘(じやうじやう) のきではない。背といひ毛並みといひ顔の造作といひあえて他の猫にまさるとはけつして思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、いま吾輩の主人にえがきだされつつあるようなみようなすがたとは、どうしても思われぬ。第一色がちがう。吾輩はベルシャ産の猫のごとく黄をふくめる淡灰色(たんかいしき) にうるしのごとき斑入りのひふを有している。これだけは誰が見てもうたがうべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければとび色でもない、さればとてこれらをまぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評しかたのない色である。そのうえふしぎなことは目がない。(中略) しかしその熱心には感服せざるをえない。なるべくならうごかすにおつてやりたいと思つたが、さつきから小便(せうべん) がもよおしている。身うちの筋肉はむずむずする。もはや一分も猶予(ゆうよ) ができぬ仕儀(しぎ) となつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分(じゆんぶん) のして、首をひくくおしだしてあゝと大なるあくびをした。さてこうなつてみると、もうおとなしくしていてもしかたがない。どうせ主人の予定はぶちこわしたのだから、ついでにうらへいつて用をたそうと思つてのそのそはいだした。すると主人は失望といかりをかきまぜたような声をして、ぎしきの中から「このばかやろう。」とどなった。この主人は人をののしるときはかならずばかやろうというのがくせである。ほかに悪口のいいようを知らないのだからしかたがないが、今までしんぼうした人の気も知らないで、むやみにばかやろうよばかりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩(へいぜい) が彼の背中(せなか) へるときにすこしはいい顔でもするならこの漫罵(まんば) (みだりにののしること) もあまんじてうけるが、こつちの便利になることはなに一つこころよくしてくれなこともないのに、小便に立つたのをばかやろうとはひどい。がんらい人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。すこし」

「やらなくてはこのさきどこまで増長するかわからない。」

(夏目漱石『吾輩は猫である』(上)『青い鳥文庫』)

(1) 「主人」の描いている「吾輩」の絵はどのような絵だと考えられますか。完成した絵を見た人の感想として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア. すごく不細工で、普通の猫とは思えないね。

イ. 目が描かれていないけど、この猫はたぶんベルシャ猫なのかなあ。

ウ. 見たことのない生き物の絵だけれど、一生懸命描いたという情熱を感じるね。

エ. かなり変わった色だけれど、芸術的で素敵だね。

(2) 先の本文中の||部(3ページ)に「猫がしゃべる日本語は、読みやすく、おもしろいというので、大変評判になった」とありましたが、猫がしゃべっているからこそおもしろいと言える内容の一つに、人間への苦情を猫の目線で語っている点があります。このことをふまえて、『吾輩は猫である』の一節中(7ページ)の「||」に入る内容を、二〇字程度で考えて答えなさい。

二 次の問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の――部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

- ① 線の長さをジヨウギで測る。
- ② この子犬はコウキシンでいっぱいだ。
- ③ 「準備ができたなら、シキユウ来てください。」

問二 次の――部の漢字の読み方をそれぞれひらがなで答えなさい。

- ① 長所と短所は表裏一体である。
- ② この辺りにおいておいしいイタリアンのお店があるはずだ。
- ③ 五月雨式に質問してすみません。

問三 中野さんは漢字の熟語を使ってパズルを作りました。このパズルでは、【例】のように、矢印の向きと長さに従って熟語が完成されます。しかし、水とうのお茶をこぼしてしまい、一部がにじんでしまいました。にじんでしまった部分（「？」と表記されている部分）に入る漢字を考えたらうで、このパズルの①～⑧の空欄にあてはまる漢字をそれぞれ一字答えなさい。なお、①～④、⑤～⑧はそれぞれたてに読むと、ある四字熟語が完成されます。

【例】

対	処		
	置	換	
	室	気	配

	①	度	?
事	②		量
無	③		点
	④	幹	?

		税	
寄	⑤	?	
逃	⑥		
?	⑦	針	
	⑧	級	?

B ことわざ・慣用句に関する問題

問四 次の①～⑤の意味にふさわしい【ことわざ・慣用句】をそれぞれの語群から探し、その語群の空欄に入る適切な【動物】を、ア～カからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① ただでさえ強い力をもつ者にさらに強い力が加わることのたとえ。
- ② 値打ちがわからないものには何を与えても無駄だということ。
- ③ 突然のことに驚いてあつげにとられているさま。
- ④ 二つのことを同時に成し遂げようとしても、結局どちらも失敗に終わること。
- ⑤ 油断できないこと、危険であることのたとえ。

語群【ことわざ・慣用句】

- ・ □が豆鉄砲を食ったよう
- ・ 二□を追う者は一□をも得ず（□には同じ動物が入る）
- ・ □の耳に念仏
- ・ □に鯉節
- ・ □に翼
- ・ □に真珠

選択肢【動物】

- ア. ハト イ. ツバメ ウ. トラ エ. ネコ オ. ウサギ カ. ブタ

C 文法・言葉づかいに関する問題

問五 次の①～⑤の文から、文法的に不適切な部分を一カ所ずつ探し、適切な表現に書き直しなさい。

- ① たとえ雨が降ったら、文化祭は行われる。
- ② 昨日はハイキングをして疲れたので、よく寝れた。
- ③ 私の中学校での目標は、部活動の大会で全国一位になりたいです。
- ④ 友人にもらった誕生日プレゼントがすごい大きかった。
- ⑤ このテレビ番組はまるでおもしろいなあ。

問題は以上です。

